

「下山健太郎、野原万里絵」展 (企画者: 水田紗弥子)

下山健太郎 (しもやまけんたろう)

1990年 東京都生まれ
2016年 東京造形大学大学院 美術研究領域 修了

視覚では捉えきれない感覚や、把握しきれない事物に絵画やインスタレーションを通じてアプローチする。観察した事象が、素材や展示方法を換えながら繰り返し登場し、作品は屋内だけでなく屋外にも設置される。主な個展に「Someday」(2019年、reading room、台湾)「seeing far away」(2017年、BRAVENESS CONTEMPORARY、神奈川)、主なグループ展に「国立奥多摩湖 ~もちつもたれつ奥多摩コイン~」(2020年、gallery αM、東京)「もの・かたり手繰りよせることばを超えて-」(2019年、代官山ヒルサイドテラス、東京)、「朝飲んだ水、濁り泡立つ川と透き通った黄金のおしっこ。乾いた堅い毛に跨がる夕方、砂の上では土亀がすべる」(2018年、西郷山公園、東京)などがある。

野原万里絵 (のはらまりえ)

1987年 大阪府生まれ
2012年 Royal College of Art (London) 交換留学
2013年 京都市立芸術大学大学院 美術研究科絵画専攻 油画 修了

おおさか創造千島財団が企画運営する共同スタジオ Super Studio Kitakagaya を拠点に、画家として活動、自ら制作した定規や型紙などの道具を用いた絵画作品を制作・発表している。また、子どもたちを対象にしたワークショップも日本各地で開催。さまざまな土地で出会った人々と協働で巨大な絵画作品を制作し、展覧会で発表している。近年の活動に、個展「埋没する形象、組み変わる景色」青森公立大学国際芸術センター青森 (2020年 / 青森)、個展「途中は案外美しい」枚方市立御殿山生涯学習美術センター (2020年 / 大阪)、「整頓された混乱」gallery TOWED (2020年 / 東京)、「飛鳥アートヴィレッジ 2019 回遊」奈良県立万葉文化館展望ロビー (2019年 / 奈良) などがある。

展覧会によせて (企画者: 水田紗弥子)

アーティストがなにを描くか、どのように描きつづけるか、ということに興味がある。今回は線や形をどのように生成させ、変化させていくかということを試している二人のアーティスト、下山健太郎と野原万里絵を選んだ。まず、ふたりの制作現場・展示風景を眺めるところからはじめたい。

下山健太郎

2021年4月、八王子にある下山のスタジオを訪れた。木製パネルの裏側に置かれたドローイング、椅子の上に置かれた赤いトレイに絵画が設置されていたり、壁面の汚れが絵画の一部のように見えてくる。スタジオで作品を見た経験をそのまま展示にできたら良いなと思った。ひとつの感覚がペインティングにもなり、繰り返されるドローイングにもなる。また既製品の構成による立体作品にもなる。スタジオ訪問では、線と円をさまざまな視点、素材、配置の仕方を実験しているということが理解できた。そこで今回の展示でもペインティング、ドローイング、立体などさまざまな媒体での表現を出品してもらった。

下山の作品には、ヘビやコード、道路のような線や、それらの線と関係するように描かれた円形が繰り返し登場する。線は複雑に絡み合っているのだが、尻尾と顔があるヘビとしてペインティングに登場したり、コードには電球がつけられて立体作品にもなり、起点と終点が提示された線をさまざまに描いていることがわかる。線の試みは、線と円との関係性や、視点を変えることでどう変化するかにも発展している。円形は、コインやビー玉、粘土のかたまりや、月のイメージまで広い。サイズも距離もバラバラに線に近づき、遠ざかっていく。

今回は出品していないが過去の作品《echo location》(2016年)は、ラオスの真っ暗な洞窟をライトひとつで手探りで歩き、その感覚をもとに制作されたペインティングだ。このエピソードは下山の作品を見るときヒントになる。身体を通じて環境に新鮮に出会う方法を大切にしていることがわかるし、下山の作品が視認できない光や粒子を捉えようとしていること、包み込まれるような感覚に触れようとしていること、重力から解放された浮遊感にもつながっている。さまざまに線と円の関係性に接続する方法は、靴ひもとビー玉から、窓と月まで幅広く、身体感覚を下敷きにそこから物をどう捉えるかの試みが無限に広がっていく。

野原万里絵

同じく4月に、野原の展示に訪れた。大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]、大阪府20世紀美術コレクション展「彼我の絵鑑」で、野原が選んだ大阪府の収蔵作品と共に、自作を展示をしている。コレクションを選ぶ視点も、他者の作品の読み解きも面白かったが、秀逸だったのは野原が会場でも淡々と書き連ねるノートだった。移動中にも描くというモレスキンのノートにびっしりと書き連ねられた、形や線。これが何冊もある。彼女の体内、脳内に堆積した形や線を再確認、再発見するような試みで、外部から集まったイメージを耕している。このノートを見ると、展示されている作品とも関連したり派生した形の存在に気づく。今回展示している《Drawing-計測-》シリーズも、あのノートを彷彿とさせる。脳内の収蔵庫から、野原の手を介して形と線が無限に表出する。《Drawing-計測-》の奇妙な赤い線は、奈良県明日香村の田んぼのあぜ道に一斉に開花した彼岸花の咲く景色を見て思いついたという。彼岸花の赤いラインが思いがけず田んぼの長さを表出させたように、形を計測し規定するようなラインが、見たことのないような不思議な形の存在を示しているかのようである。彼女の作品は、線や形、色やテクスチャーを自身から湧き出るものとしてではなく、自分や他者、自分と周囲との関係から掘り起こしていくところからスタートする。私がはじめて見た野原の作品は、アートアワードトーキョー丸の内2013に出品した大学院の修了制作で、モチーフ自体を他人から集め、その輪郭を検出しパソコンで組み合わせ構成した作品だった。他にも、大阪の御堂筋を歩き、看板や歩いている人の写真を撮影して集めた線を組み合わせ作った、雲形定規のような道具も「御道筋定規」などもある。ステンシルのように型として使ったり、定規のように線を引いたりなどできるこのような道具の制作も彼女の作品の要である。環境からさまざまな要素を蓄積し、堆積された無数の要素が、野原の身体を介して作品に接続される。今回の出品作品「石の肖像-埋没する形象03-」のアイディアは、インドのデリーにある世界遺産クトゥブ・ミナールという遺跡から得ているという。1200年頃に建てられた塔で、イスラム教ではない他宗教の寺院の石材を転用して積み上げられており、色や模様も年代によって異なるような石積みの塔である。本作はサイズの異なるパネルを組み合わせるようなスタイルで、色彩はクトゥブ・ミナールと、青森で野原が収集した石から抽出されている。本作は、国際芸術センター青森(ACAC)というレジデンス施設で滞在制作された。下地は青森県内で集めた石の模様や色をモチーフにして、絵の下地をACACで開催したワークショップ参加者と協働制作し、その上に野原の脳内の収蔵庫からの形が描かれていく。そしてレジデンス終了後も、絵の具を足したり削ったりして、本作を完成させた。

視点をずらし、大きさを自在に変え、歩き、話し、動くことで、周囲の環境から現れる象(かたち)をさぐり、ひろい、試しながら、創造する下山健太郎と野原万里絵の制作プロセスに共通項を感じて今回の企画に至った。ふたりの制作に触れると、現前と存在する作品が常に生成変化を遂げていくため「現象」として捉えることができるのではないかと考えた。そこで私の頭によぎったのは、宮沢賢治の「わたくしといふ現象」から始まる「春と修羅」である。はじまりはこんな風である。

「わたくしといふ現象は／仮定された青い有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)／風景やみんなといつしよに／せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です」

心象スケッチである賢治の作品「春と修羅」は「わたくし」を描くのではなく、「わたくしという現象」に向き合っているところが肝要である。また、その仮定された有機交流電燈は、なにかしらのエネルギーの交流で生成しピカピカ、ちかちか光っているように思える。つくるときの「わたくし」性への疑問を持ちつつ、「わたくしという現象」による交流に常に気を配り、風景やみんなと共に常に明滅するそのあり方は、制作を継続することが制作であるというふたりの作品にも共通している。ふたりの作品は形や線に焦点を当てやすいが、実はその下層に経験や体験が隠れておりその過去の時間を解体し再構成して制作していることに着目してほしい。